

2022年2月19日(日)13:30~15:30

IPBES シンポジウム「持続可能な将来に向けて、自然の価値とわたしたちの価値観を問い直す」
詳細レポート

0. 趣旨説明

環境省・竹原真理専門官

自然の価値、私たちの価値観を今回のシンポジウムのテーマにしたのは、持続可能な社会をつくるためには、私たちの価値観を問い直さなければいけないと言われているからです。自然に対する私たちの見方はさまざまで、例えば私は登山でよく山に行きますが、同じ山でもハイキングの場としての見方、木々の材木としての価値、生きものの生息地という見方、さらには御神体という見方など、さまざまな見方があります。昨年 IPBES が自然の価値に関する報告書を発表しましたが、ここには近年の政策決定では経済的に評価できる自然の価値が優先的に評価されていることや、私たちの価値観を問い直す必要があることが指摘されています。今回は冒頭に、IPBES に深く関わられている橋本さんに報告書についてご説明頂き、その後、日本で自然の価値を大切にしたい取り組みをされている方々にお話を伺います。本日はぜひ楽しんで発表をお聴きいただき、自然についての私たちの価値観について考え直すきっかけにして頂ければ幸いです。

1. 基調講演

「IPBES 価値評価報告書のポイント解説」 橋本 禪 東京大学大学院 農学生命科学研究科 准教授

これまでに、生物多様性政策に関する 2 つの大きな転換点がありました。1 つ目はミレニアム生態系評価です。それまでは希少種を守るなどが議論の中心でしたが、ミレニアム生態系評価では、自然の便益に人々の福利が支えられているという考え方が示されました。これによって、生物多様性は人々にとって極めて有用であるから守らなければいけない、という考え方への大きな転換がありました。2 つ目は、IPBES の地球規模評価報告書です。それまでは生物多様性減少の直接要因への対策が中心でしたが、こうした直接要因への対策では不十分であることが理解されるようになり、背後にある生産・消費パターン、人口、貿易、技術革新、ガバナンスなどにメスを入れなければいけないという方向に議論が大きく変わってきています。価値評価報告書は、世界の生物多様性の危機の原因と対処の機会を、政治的・経済的決定において自然がどのように評価・考慮されているのかと密接に関係していると指摘しています。そして、自然の価値は多様であるにもかかわらず、我々の意思決定が極めて狭い範囲の価値を優先していることにも触れています。経済的価値ばかりを評価して収奪し続けた結果、物資の生産だけが増加し、他方で他の自然のサービスが失われてきました。

自然の価値はこれまで、道具的価値と内在的価値の 2 項対立で議論されてきて、道具的価値を認識することで、生物多様性を人々にとって身近な問題であると説明してきました。しかしこの 2 項対立では表現できない、関係価値の重要性が見いだされるようになりました。自然への愛着やアイデンティティ、自然を守らなければいけないという意識などがそれに当たりますが、関係価値という概念自

体あまり知られていません。同報告書では価値評価の取組みの現状についても報告していて、ヨーロッパや北米で多いがその他の地域では少ない、実施されても必ずしも意思決定に使われていない、評価対象が道具的価値であることが多く、内在的価値がそれに次ぎ、関係価値を対象にした研究はさらに少ないなどの課題を指摘しています。これを踏まえて、自然の価値の多様性を認識し、評価することで、自然の価値を考慮した政策立案が可能になるという指摘をしています。

また、我々の世界観や知識体系も、我々が自然をどう見るのかに影響します。自然の中で生活することや農業を通じた自然との触れあいによって得られる生きがいのようなものも、こうした世界観に含まれます。知識体系には私たちが生きる西洋科学的なものだけでなく、さまざまなものがあることを認識する必要性が指摘されています。

持続可能で公正な社会に向けて、価値に基づく4つの介入点への働きかけが必要とされていて、これには身近だが効果が薄い、浅い介入点から、実行が難しいが影響が大きい深い介入点まであります。いちばん深い介入点が社会目標の転換です。これは国の豊かさをどうみるのか、物質的な豊かさでみるのか、経済的な豊かさでみるのかといったもので、GDPが必ずしも国の豊かさを表していないという議論もあります。また、短期的な価値判断から、社会全体で持続可能性に沿った価値観を育む方向へ転換することの重要性にも触れています。

2. 取組紹介

①「人新世の生物多様性と脱成長」 齋藤 幸平 東京大学大学院 総合文化研究科 准教授

脱成長という価値観の大きなパラダイム転換が必要なのではないかという視点から、IPBESのレポートについて考えてみたいと思います。2022年の報告書では、社会変革の必要性がはっきりと説かれるようになってきていることが象徴的です。どのような価値体系や社会変革が求められているのかを考えると、結論からいうと、脱成長が欠かすことのできない1つの開発パラダイムになるのではないかと思います。この変化は困難を伴う深いものになる、しかしこれなしには我々が直面している大きな危機に立ち向かうことができないと考えています。脱成長は、先進国における無際限なGDP増大を目指す経済システムの在り方を、平等や持続可能性を意識したものに転換していくという考え方です。生物多様性喪失の背景には経済成長があることを無視できません。経済成長のための資源利用と貿易、気候変動、土地利用変化、外来種の侵略が起き、結果として生物多様性が脅かされています。今起きている生物多様性の喪失は、人口が100億人に近づく中で影響が大きくなっていることだけに還元できないもので、社会・経済的な要因、資本主義という、無限の経済成長を求め続けるシステムの問題に紐づけて考える必要があります。

そこでどうするかという時に、デカップリング、すなわちGDP増大と結びついてきた資源利用の増大を技術革新による効率化によって削減するという、グリーン経済のパラダイムが生まれました。CO₂削減のため、電気自動車や再生可能エネルギーなどの技術的問題に還元し、開発して普及する、そのための補助金を出す、炭素税をかけるといったように具体化していくことができます。

しかし、生物多様性の問題とGDPのデカップリングは、自然が社会に果たしている多様な価値、多様な機能を考えると容易ではない、従って脱成長へのパラダイムシフトが求められてきます。マテリア

ルフットプリントといわれる、資源消費の指標は、GDP の増大に合わせて増加する、密接な相関関係があり、土地利用や気候変動といった形で地球環境への負荷を増大させます。CO₂ を削減する電気自動車の開発の過程で、銅、コバルト、ニッケル等の資源需要の増大などにより、生物多様性が脅かされるという皮肉な結果を生みかねません。

UNEP のグリーン経済のモデルを含め、これまで開発モデルは成長モデルに規定され続けてきていて、これがずっと支配的で、IPBES のシナリオなどにも影響を与えてきました。ところが 2022 年の IPBES の報告書には、脱成長も一つの道筋として挙げられるようになっていて、近年の大きな変化だと考えています。経済成長に限定されない、オープンな考え方、抜本的な社会変革を迫るものになってきていることが重要です。

もう 1 点、脱成長が、西洋的な、人が自然から切り離されて存在する人間中心主義的な自然から脱却する必要性、先住民の持っている慣習や世界観に学ぶ必要性も指摘されていることも重要です。資本主義以外へのオルタナティブも考えていかなければいけません。エクアドルの憲法に取り込まれていた Buen vivir の思想もその 1 つですし、アイヌの伝統や文化からも私たち日本で暮らしているマジョリティが学び直さなければいけません。環境破壊やマイノリティへの抑圧を反省し、先進国が成長主義から脱却するプロセスを経てはじめて、生物多様性、脱炭素を含めた持続可能な経済への転換が実現可能になる、この価値観の転換を今の私たちがどれだけ進められるのかが問われているのではないのでしょうか。

② 「アイヌの世界観と生物多様性保全」 秋辺 デボ 阿寒湖温泉地区景観協議会 会長

アイヌの伝統的な自然観、価値観について、3 つのテーマが織り込まれた映像を見てください。

(映像)「ウレシバモシリ」とは、育てあう大地のこと。人間と自然は分け隔てられるものではなく、互いに育てあう大きな 1 つのもの。この考え方がアイヌの生き方の根っこにある。「カント・オロ・ワ・ヤク・サク・ノ・アランケブ・シネブ・カイサム」は、天から役目なしに降ろされたものはひとつもない、ということ。アイヌの大切な哲学の 1 つ。「イランカラプテ」は、心と心でつながりたい、ということ。

天から役目なしに降ろされたものはないというのはアイヌの基本的な考え方です。ウイルスでもネズミでも、風も山火事も、すべて役目があるという考え方を持っていて、人間の価値観に沿って必要だ、必要でないという判断はしません。役に立つから益獣、役に立たないから害獣というように、認識にかなったものだけに価値観を見出すという考え方はやめた方がいい、というのが先住民アイヌの考え方です。地球上に存在しているものにはかかわりがある、その中で我々は生きているし生かされている、人間は自然の一部であり保護されているという考え方を持っています。しかし 20 世紀になってから、山で木を切る仕事、トラック運転手などで仕事をしなければいけない、私も今回空気を大量に汚すジェット機に乗ってここに来ているように、先住民族であっても自然環境への加害者になりうるわけです。だから、同じ目線で、人類として一緒に考えたいことがある。それがウレシバモシリ、育てあう大地、という言葉に集約されます。私たち人類の生き残りをかけた哲学において、人間が支配者ではないという考え方が大事です。

かつてのアイヌの主食は鮭で、こんな伝説があります。石狩川の岸辺に男女一対の神様がいて、ヒ

グマが何頭、カラスが何羽いるかをカウントして、それが食べられるだけの分と、途中で死んでしまう分を含めた数の鮭を送り出すよう天の神様に伝えます。しかし人間の数はこのカウントには入っていないので、余った分を少しだけ分けてもらいます。人間中心主義が現代の問題の根底にあって、これをやめないと今後も同じようなことは続いていくと思っています。これは新しい考え方ではなくて、かつて全人類が持っていたのに、産業革命以来忘れられてしまっている、そこをもう一度、みんなで思い出せばいい、そういう考え方がこれから必要になると思います。

自然破壊をすっかりやってしまってから、どうやったら回復できるのかを先住民に聞かれてもわかりません。壊さない方法は知っていますが、再生するためには科学的見地も含め、知恵を絞りだして、一緒に考えていくしかありません。21世紀の現代社会で、アイヌ民族だけが、自然保護活動家だけが自然破壊の外側にいるわけではない、同じ土俵にいる仲間という目線で主張していくことが大事です。

③「種を守り継ぐこと」奥津 爾・典子 オーガニックベース主宰

吉祥寺で飲食店をやしつつ、タネを守る活動をしていましたが、10年前に、タネを守る場所で生きることを選んで雲仙に住み始めました。ここでは周りで農業の大規模化が進んでいますが、多品種の在来種を守る農業を守っている場所の野菜を扱っています。東京のスーパーを覗くと1種類のダイコン、青首大根しかなくて、雲仙では13種類のダイコンが並んでいます。青菜でいうと、小松菜、ホウレンソウを想像されると思いますが、雲仙では7、8種類並んでいます。直売所から車で20～30分圏内で、農薬、化学肥料を使わず栽培されている野菜が、冬野菜は70～80種類、端境期でも20～30種類あります。

こんな風に、生物多様性といっても身近なものを見ていて、その台所への最前線に直売所があります。都会の直売所だと意識の高い方が集まる場所になるのですが、僻地の直売所では圏内の普通の方がふらっと来て、平家ダイコンは煮るとおいしいとかいう話をして興味を示して下さる、そのようなコミュニケーションの場になっています。

今の農業は9割方外国産の種を使っていて、在来種の野菜をスーパーで見るとはほとんどありません。在来種はそこで育ち、土地のことを記憶したタネが撒かれての繰り返しで、こうした、土地のことをよく知った野菜をその土地の直売所で売っていることが気持ちよくて、雲仙の風土を日々料理して、体の中に入れていたことが尊いと感じます。若い人が、こういう店を地元でやりたいという声を聴きます。地元の在来種、自然に寄り添って作られた野菜を買える場所が少なくて、マーケットが東京とかの街に集中しているからでしょうか。私たちは、地元の人と一緒に作って売って、料理を提供して、料理教室で作り方を共有したりしています。異常気象の中でタネを守ることがリスクになり、難しくなっている中で、農家の支えになればという思い、そのモデルを作りたいという思いでやっています。

在来種の農家の方は、強い種を残そうと思って、自分が良いと思うものを母本に選んでいくのを繰り返したら弱い種になってしまった、人間の価値観が必ずしも正しくないことを学んだということをおっしゃいます。

台所は現実の最前線で、実感として、食べ物が命であるというのを体感する場所として台所のもつ役割がいいのではないかと思います、それを伝える役をさせて頂いています。台所から、善悪二元論から

の脱却を試みています。人間にも自然が必要とする役割があって、それを見つけていくにはどうしたらよいかを探求していきたいと考えています。

④「お手伝い×旅で、地方と都市を結ぶ」永岡 里菜 株式会社おてつたび 代表取締役 CEO

日本各地に培われてきた文化や歴史、地域の方々の想いに触れてもらえるようなプラットフォームを作りたいと思って、「おてつたび」というサービスを立ち上げました。おてつたびとは、お手伝いと旅を掛け合わせた造語で、日本各地の人手不足をはじめとする困りごとのお手伝いをしながら、旅行ができる、を実現するプラットフォームです。地域に著名な観光地がなくても、お手伝いという目的で人が訪れる、長く滞在して暮らすように地域の魅力を知ることができるようなプラットフォームを目指しています。おてつたびのミッションは、「誰かにとっての“特別な地域”を創出すること」です。インターネットでは伝わりきらない、埋もれてしまっているような、地域にしかない魅力がたくさんあると思います。まずは来てもらい、好きになってもらう。そしてファンになってもらい、ファンからファンが広がることによって、地域の文化や歴史が広がる世界ができないかと思ってやっています。

以前、全国を飛び回る仕事をしていて、私の出身の尾鷲のように一見何もなさそうに見える地域に、なんだここすごいとか、素敵なものを発見する体験があり、そんな地域が全国にたくさんあることをいろんな方に教えてもらい、そういう地域に人が訪れる仕組みづくりに自分の人生を使いたいと思って始めました。地域の魅力をどうやったら伝えられるのかを試行錯誤する中で、地域の魅力、文化、歴史や人々の想いを、地域の方から教えてもらえることがわかりました。そこで着目したのが、人手不足でした。半年間全国を巡っていた時、知り合いの農家の方に誘って頂いてトマトの収穫の手伝いをしました。そこで農家の方が農作物にかける思い、地域でしか取れない作物の物語を教えてもらい、この自分の経験を通じて、人手不足を、人と人、人と地域が出会えるチャンスに変えられるのではないかとということに気づきました。

現在、ユーザーの半分くらいは大学生です。ユーザーの方はお手伝いをするとアルバイト代が得られ、旅費を軽減できます。著名な観光名所がない所にも人が訪れて、ありのままの地域を知ることができます。おてつたびの希望者と地域をマッチングするプラットフォームは自社開発のもので、相互レビューもできます。現在受け入れ先は900か所あり、4割が1次産業、4割が観光業、その他はお祭り、雪かきや地域のマルシェなどもあります。滞在する中で地域の方と交流したり、お手伝いで得たお金を地域の施設や飲食店で使って地域に落として帰ってくる、そういうモデルも作っていきたいと思います。そのような中で、日本にはこんな面白い地域がある、というのを、積極的に伝えていきたいと思っています。

参加者にとっては、日本のこと、地域のことをもっと知りたい、地域の方と交流を持ちたいというのが一番の理由で、つながりを意識している方が増えています。コロナ下でもユーザーが3倍に伸びていて、地域に関心のある方、特に農業に関心のある方が増えていると感じています。地域の興味がある方、農業に興味があるがどう一歩を踏み出しているかわからない方が多い、その一歩目を踏み出す支援をできる存在になれるといいと思っています。

地域の方もピンポイントな人手不足に困っている時に助けになり、これを人と地域の出会いのチャ

ンスにできたらと考えています。参加者の中にはそのまま地域に根付かれていたり、地域のことを発信する活動をしている方もいる。こうやって地域のファンがどんどん増え、ありのままの魅力を伝える、そんな循環を生んでいきたい、そして地域にしかないような魅力を知れるような入り口を開いていながら、地域に関わるような動線を作っていきたいと考えています。

3. パネルディスカッション

武内和彦 IGES 理事長がモデレーターを務め、各登壇者の発表内容および専門を踏まえた質疑応答を行いました。

- 武内： 関係価値の重要性について橋本さんからお話頂きました。生物多様性条約の長期目標には自然と共生する世界の実現が掲げられていますが、これを科学的に裏付けるような議論のご紹介でした。斎藤さんからは脱成長に向けた社会転換というお話を頂きました。私自身、資本主義のあり方を問い直すような動き、特にダスグプタ教授が提唱するインクルーシブ・ウェルス、包括的富といった考え方にも触れてきました。包括的富にも接したことがある。秋辺さんからは伝統的な自然観を尊重することの重要性についてお話頂きました。私自身、オーストラリアでアボリジニーに触れあう機会があり、こういった価値観を再評価することが重要であることを学んだ経験がございます。奥津さんご夫妻からは、伝統的な野菜を生産することについてお話し頂きました。世界食糧農業機関(FAO)が出している報告書の中で、世界で栽培されている作物の種が極めて限定的なものになっていることについて危機感を持つべきという報告があります。永岡さんからは地方と都市の連携のお話を伺いました。今まで都市と地方が分断され、海外からの農産物の輸入に依存している状況をいかに克服して、地域の自然資本と人的資本がお互いに往き来する共生関係、環境基本計画の中では地域循環共生圏という概念を提唱しましたが、その対流を、関係人口を通して活性化していくというお話でした。
- ご登壇者それぞれの立場から、私の質問にお答えいただきたいと思います。私の問いは、自然と共生する持続可能な将来に向けて、一人ひとり、そして社会の行動変容を促すために、どのように現代の人の価値観を変えていく必要があるのか、というものです。
 - 斎藤： 価値観を変えるというのは非常に難しいことです。新自由主義的な政策によって、あまりにも一部の人が富を独占して、地球環境を破壊するようになっていて、これを野放図にしてよいのかというのを、社会変革という視点からこういう問題を訴えていく必要があります。富の偏在を抜本的に是正していく必要がある、これを訴えていいんだという価値観の転換は欠かせないと思います。
 - 秋辺： 生物多様性の中に人間も含めて考えるのは当然です。その場合、すべてのものに感謝する、謙虚にものを見ることから、価値観の変容を導き出していく。人間は進化しているようで、むしろ退化しているのかもしれない。もう一度、人間本来の正直な気持ちはどこにあるのか、経済活動もいい加減にしなさい、それをバランスよくやっていきましょう。
 - 奥津爾： 直売所という最前線で、普通の人に、物語のある野菜を食べてもらう所に全神経

を集中している。在来種の、規格化されたものにはないおいしさ、存在感や花の美しさなども、直売所を通じて伝えていきたい。それが各地にできたらなお素晴らしいと思います。

- 奥津典子： 成長ではない豊かさを実現して頂きたい、それを共有できる言語で示して頂きたい。台所でどんなものを使い、作っていくのかという所から、皆さんにトライしてみてくださいと思います。
- 永岡： 自分ごと化する機会をどう作るかが大切だと思います。地域にお客様として関わるのではなく、一緒に作り上げている仲間として関わることによって、感謝や謙虚な心が生まれる。そういった関わりの中に、フードロスや温暖化、生物多様性の問題をダイレクトに知ることができて、何かできないかと考える機会があります。高齢の農家さんも頑張っているのがわかって、自分事ができるようになります。橋本先生もおっしゃった、関係価値にも密接に関わってくる部分かなとも思っています。
- 橋本： 冒頭で抽象的な話をしてどう伝わるのか心配してましたが、皆さんから具体的なお話を頂いて、このシンポジウムの狙いとする所は伝わったのではないかと思います。環境問題の背後には、人と自然の関係の断絶が、根本的な原因として指摘されています。私たちはますます都市で生活し、グローバル経済の一部になってく中で、我々の消費や普段の行動が自然環境にどう影響しているのかが理解できなくなってきていて、これが普通になっています。秋辺さんや奥津さん達の話からも、本来我々が持っていた、自然と密接に関わった生活から変わってきている。シンポジウムをご覧になっている方は、必ずしも自分が人間中心的に生きているとは思われていないと思いますが、自然と人との関係が断絶される中で、さまざまな問題が起こっていることを理解して頂きたい。奥津さんのお話にあったように、台所から、何を飲み、何を食べるのかということなど、接点を見出す必要があります。自分たち以外のものとどうつながっているのかについて、想像力を働かせることが大事です。自分の生活を顧みるという意味では自分事にしなければいけないし、私たちと他者がどう違うのか、自分たちのものの見方だけがすべてではないことに理解を深め、生活での判断の材料にしていく必要があります。そうした中で、自分たちが変化のきっかけになるということをご理解頂ければと思っています。
- 武内： 今回は IPBES のアセスメントで価値の問題に取り組んだということで、いろんな題材をもとに展開しました。IPCC では科学的知識をベースに議論をしていて、IPBES では文献にないような知識も包括的に取り扱う必要性を認識する中で、この問題を扱ったことをご認識頂きたいと思います。IPCC も、このように価値の観点を含めていくことでより、深いアセスメントができるのではないかと考えています。

4. 閉会

- 奥田： お話を頂いた方には、心から感謝を申し上げたいと思います。本日のテーマ、「自然の価値とわたしたちの価値観を問い直す」は、人と自然との関係を見直すことと言い換えられると思います。結論として私の心に残ったのは、あたりまえに思うこと、常識を疑うということ

す。そのためにはひとりひとりが謙虚になること、自分たちの考えだけでやっていていいのかということ問い直すことが重要で、それが多様性を重んじるということにもつながります。本日の議論では抽象的、理念的な話が現場レベルの話につながったのではないのでしょうか。どういうふうな考え方を行動の変化に結びつけていくのか、これを実現していかなければいけないと、改めて感じました。生物多様性国家戦略にも、自然の理に沿って行動を選択しようということを書かせて頂いています。今日の議論が、一人ひとりが行動を見直して、自らのものとして理念からの行動の変革と、そのように社会全体が変わっていることを願ってやみません。本日の議論を踏まえて環境省としても政策的に社会の変革に向けて頑張りたいと思います。

以上